Power Platform 統合の得点力を強化する

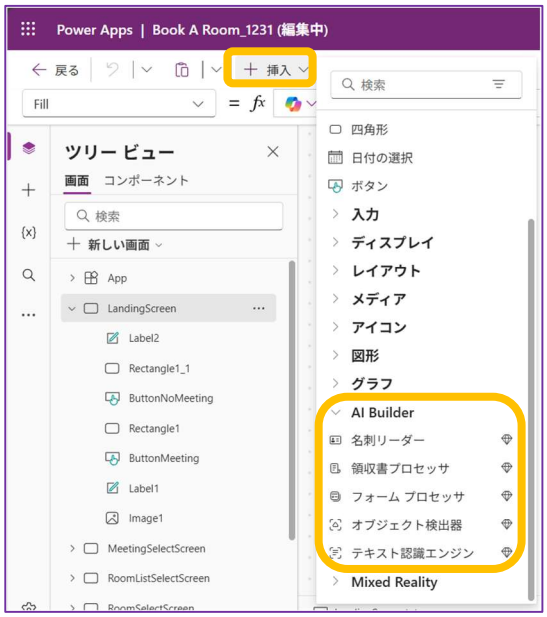
PL900 試験では「Microsoft Power Platform の AI 作成エクスペリエンスについて説明する（10–15%）」「Microsoft Power Platform のビジネス価値を説明する（20–25%）」の範囲で AI とセキュリティ管理が出題されます。重要なのは、AI Builder のユースケース、チャットボットの構成要素、Power Platform 管理センターの基本操作の理解です。

AI Builder

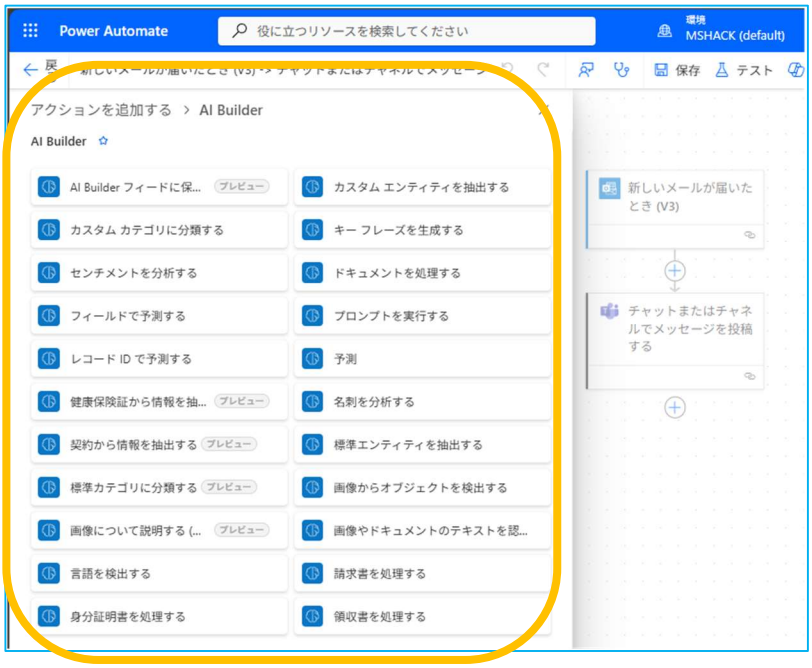
基本概念とビジネス価値

AI Builder は、ノーコードで AI 機能をビジネスアプリケーションに統合する Microsoft Power Platform の中核サービスです。専門的な AI 知識を必要とせず、Power Apps や Power Automate と連携して業務を自動化できます。
AI Builder は単独サービスではなく、Power Platform 用の AI アダプタ／モデル提供機能であり、Power Apps や Power Automate の機能の一部として現れます。

▼Power Apps は「＋挿入」より



▼Power Automate はアクションとして追加可能



モデルの分類と種類

AI Builder のモデルは大きく 2 つに分類されます：

1. 事前構築済みモデル

- テキスト処理系：カテゴリ分類、感情分析、言語検出、エンティティ抽出、翻訳
- 画像処理系：オブジェクト検出、名刺読み取り、ID 文書読み取り
- ドキュメント処理系：請求書処理、フォーム処理、レシート処理

2. カスタムモデル

- 予測モデル：過去のデータパターンを分析して将来の結果を予測
- カスタムドキュメント処理：特定のフォーマットの文書から情報を抽出
- カテゴリ分類モデル：独自のカテゴリ分類ルールを学習

AI モデルの確認

Power Apps や Power Automate の「AI モデル」画面で、「事前構築済みモデル」と自分で作成した「カスタムモデル」の一覧を確認できます。

▼AI モデル画面

モデルの共有：

作成者が作成したモデルを動作させるには「公開」が必要です。一度公開すると、Power Apps／Automate の両方で利用可能です。
また、他のユーザーでも動作させるには「共有」する必要があります。

AI Builder のライフサイクル：

1. データ準備・モデル設計
2. トレーニング・検証
3. 公開と共有・運用
4. 監視・改善

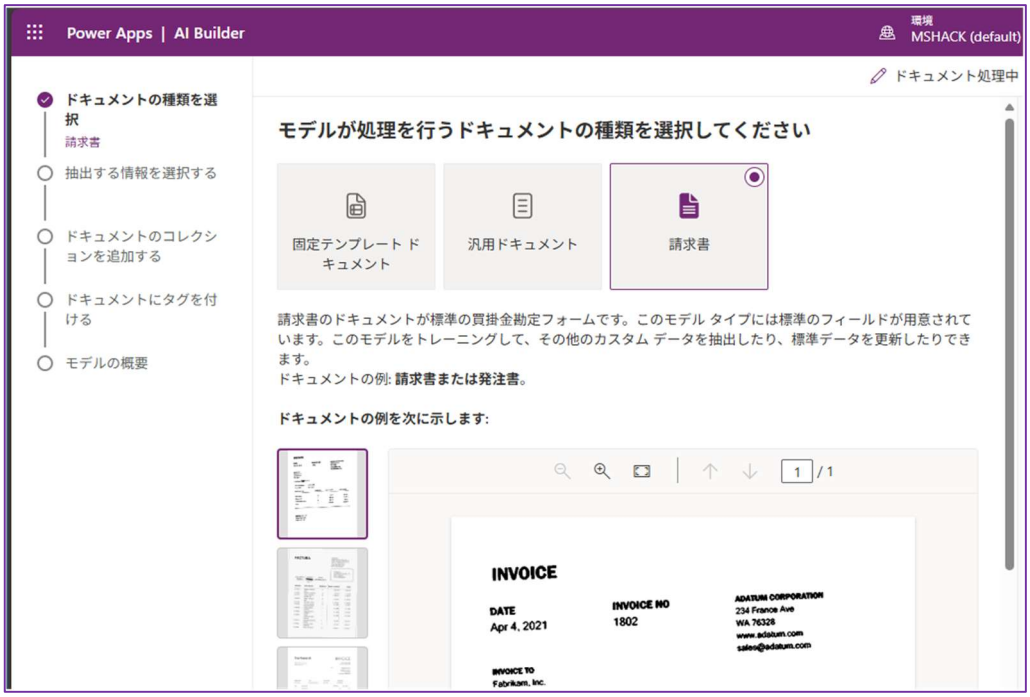
AI Builder のユースケース

- 紙ベース業務の電子化：請求書、領収書、名刺の自動読み取り
- 画像認識業務：製品検査、在庫管理での物体認識
- 予測分析：売上予測、需要予測、顧客離脱予測

▼事前構築済みモデル「請求書から情報を抽出する」の例
フロー(Power Automate)やアプリ(Power Apps)への連携が可能

この画面からもカスタム モデルを作成できます。（次頁）

▼事前構築済みモデルからカスタム モデルを作成する画面



Copilot Studio（旧 Power Virtual Agents）

チャットボットの作成

ノーコードで会話型 AI を構築

Copilot Studio は、ノーコードで企業用チャットボットを構築・管理できるプラットフォームです。FAQ 対応、申請受付、業務案内などの用途で活用されます。

▼チャットボット（エージェント）編集画面

エージェントの構成要素

- **トピック**：会話フローの基本単位
- **エンティティ**：ユーザー入力の分類・抽出
- **アクション**：外部システム連携やデータ操作

トピック（質問と応答）の設計

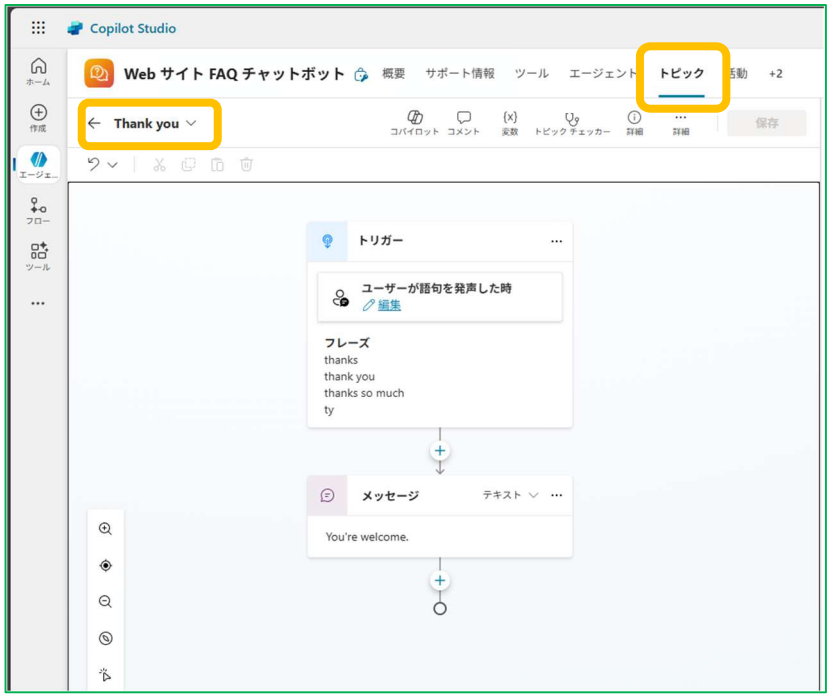
トピックは、ユーザーからの質問に対する一連の会話フローを定義する基本単位です。

▼トピック管理画面でトピックの追加や編集が可能

トリガーフレーズ：

- ユーザーが入力する可能性のあるフレーズを定義
- 一般的に 1 つのトピックに 20 以上のトリガーフレーズを設定
- 自然な会話を実現するため、多様な表現パターンを考慮

▼トピック管理画面でトピックを選択してトリガー フレーズを編集可能



エンティティ（ユーザー入力の分類）の活用

エンティティは、ユーザー入力から特定の情報を抽出・分類する機能です。

事前構築済みエンティティ：

- 日付、金額、年齢、都市、色、国、メールアドレス、ブール値など
- ユーザーが「私のメールアドレスは test@example.com です」と入力した際、自動的にメール部分を認識・抽出

カスタムエンティティ（ユーザー定義エンティティ）：

- 業務固有の情報を認識するためのエンティティ
- 製品名、部署名、専門用語など企業独自の情報を定義

エンティティの確認

対象エージェントの「設定」を選択し表示されるメニューから「エンティティ」を選択するとエンティティ一覧が表示されます。
「事前構築済みのエンティティ」および「カスタムエンティティ（ユーザー定義エンティティ）」が一覧になっており、特定のエンティティを選択すれば詳細を確認することができます。

▼エージェント編集画面の右上「設定」を選択

▼エンティティ一覧

アクション（ツール）の活用

アクションは、外部システムとの連携機能です。

- Power Automate フロー、SharePoint などの操作
- API の実行

アクション（ツール）の追加

アクションは最新の Copilot Studio では「ツール ／ プラグイン」に統合されています。

トピック編集画面の「ノードの追加」から「ツールを追加する」を選択▼

左メニューもしくは
エージェントのタブから
「ツール」を選択▼

▼ツールを追加

エージェントの公開

作成者が作成したエージェントを Teams のアプリや Web サイトの埋め込みとして利用可能としたり、API として利用するには「公開」する必要があります。

エージェントのライフサイクル：

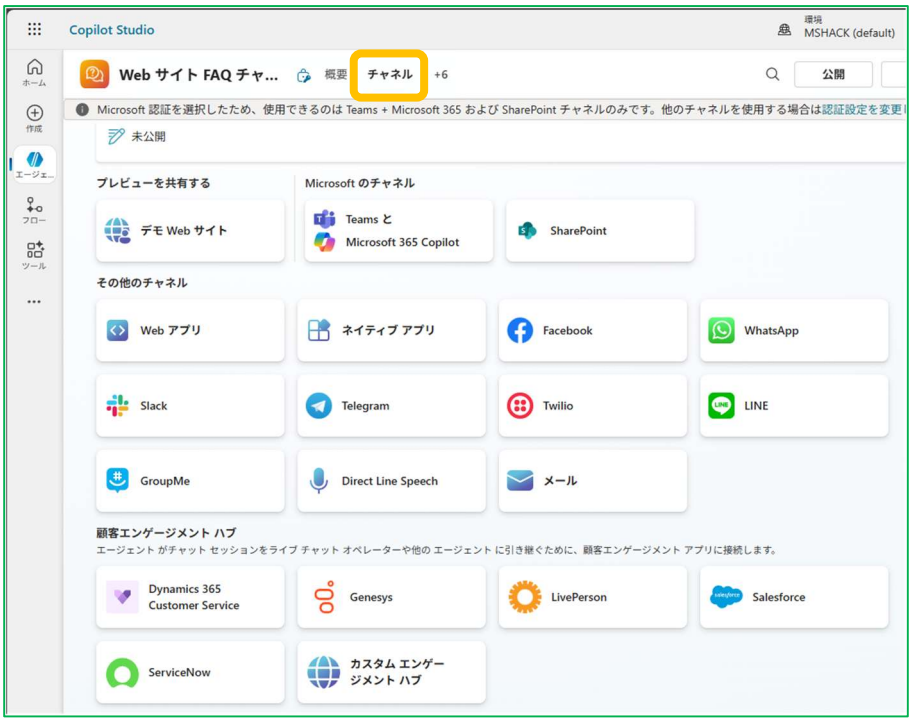
1. 作成
2. テスト
3. 公開

Copilot との連携

Microsoft 365 Copilot との統合

- シームレスな連携：Microsoft 365 のエコシステム全体でエージェント機能を活用
- データ一元化：SharePoint、Teams、Exchange などのデータを統合利用

▼エージェントの「チャネル」タブから連携可能



Dataverse や Power Automate との連携による業務自動化

- ワークフロー統合：エージェント経由で申請・承認プロセスを自動化
- データ連携：Dataverse に蓄積された業務データにリアルタイムアクセス
- プロセス自動化：Power Automate のクラウドフローを呼び出してバックエンド処理を実行

公開と管理

Web サイトや Teams への公開

- Web チャット：企業ポータルや外部サイトに埋め込み

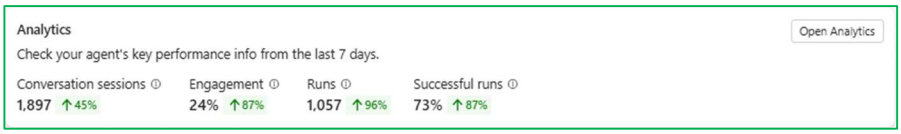
エージェントの「設定」画面の「セキュリティ」メニューで「認証なし」を選択し、
再公開すると「チャネル」タブから埋め込みコードを取得できます　▼

- Teams 統合：Microsoft Teams 内でのシームレスな利用
- モバイル対応：スマートフォンやタブレットでの最適化表示

分析と改善（会話履歴、満足度など）

- パフォーマンス分析：トピックの使用頻度、離脱率、成功率を監視
- 会話品質評価：ユーザー満足度、解決率の測定
- 継続的改善：分析結果に基づく会話フローの最適化

エージェントの「公開」により「分析」タブを利用して、エージェントのパフォーマンスを
把握し、改善が必要な領域を特定できるようになります。
「概要」タブにもパフォーマンスの概要が確認できるようになります　▼



セキュリティと管理

Dataverse のロールベースセキュリティ

セキュリティモデルの基本構造：

- ロールベースアクセス制御（RBAC）を採用
- 許可されているユーザーだけが機密情報にアクセス可能
- セキュリティロールによって、ユーザーがアクセスできるデータの範囲を制御

アクセススコープ：

- ユーザー所有：作成者のみがアクセス可能
- チーム所有：所属チームメンバーがアクセス可能
- 組織所有：組織全体でアクセス可能

重要な制約：

- レコード作成時に選択した所有権は後から変更不可
- Basic ユーザーは自分が所有するレコードのみ操作可能
- 環境作成者はデータアクセス権限なし、アプリ共有権限のみ

環境の管理（開発・テスト・本番）

環境ライフサイクル管理：

- 開発環境：アプリケーション開発・テスト用
- テスト環境：品質保証・ユーザー受入テスト用
- 本番環境：実際のビジネス運用用

Dataverse for Teams の特別な仕組み：

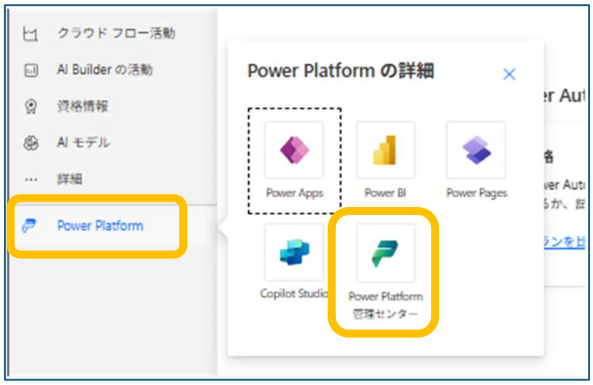
- Teams 連携：各チームに 1 つの環境が自動作成
- 自動削除：Teams のチーム削除時に関連環境も自動削除
- 固定セキュリティロール：Teams 内の役割に応じて自動割り当て（カスタムロール作成不可）

Power Platform 管理センターの基本操作

主要な管理機能：

- 環境管理：作成、削除、バックアップ、復元
- ユーザー管理：アクセス権限、ライセンス割り当て
- セキュリティロール：作成、編集、割り当て
- データ損失防止（DLP）ポリシー：コネクタの使用制限
（ビジネス/非ビジネス/ブロック済みの 3 分類）

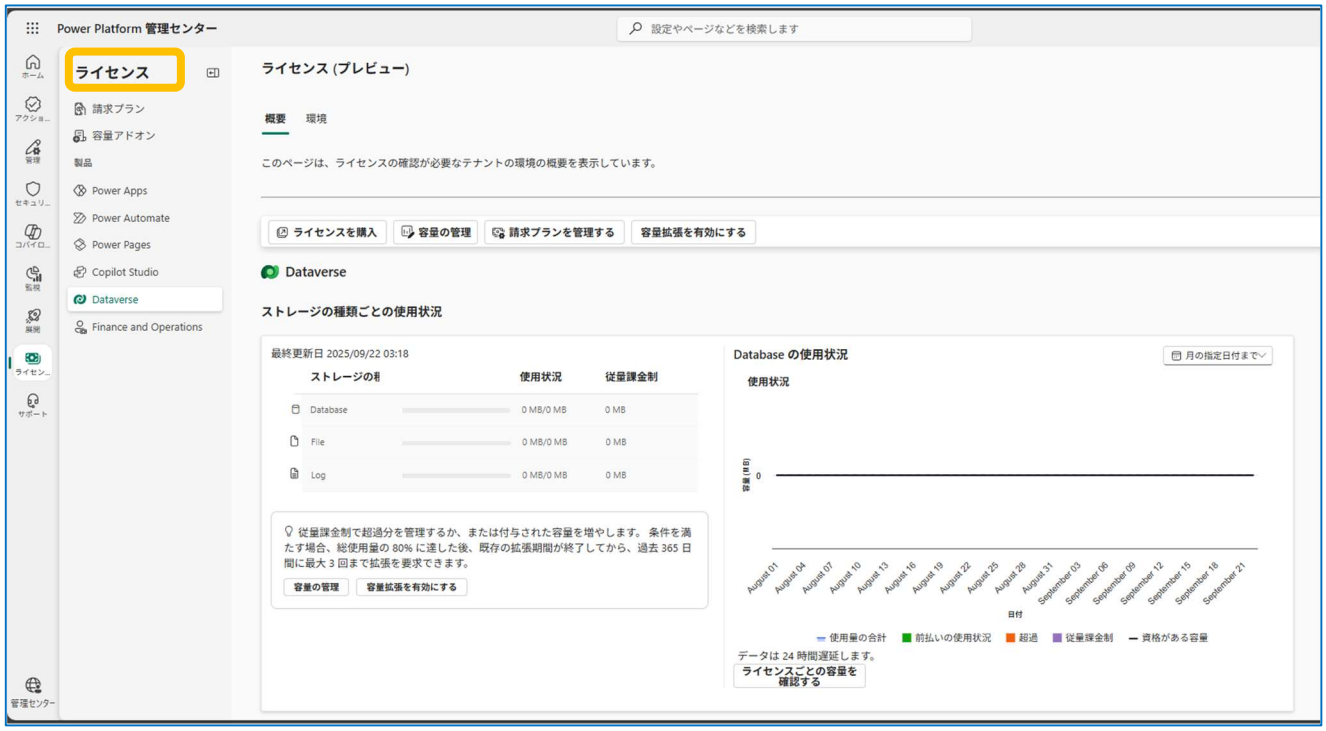
▼「Power Platform 管理センター」を選択



Power Platform 分析機能：

- 使用状況監視：アプリ使用頻度、フロー実行回数と成功率
- ライセンス分析：消費状況、アクティブユーザー数
- Dataverse 利用状況：テーブル利用状況、API 呼び出し回数
- パフォーマンス最適化：運用改善、教育重点化、ライセンス見直しに活用

▼「ライセンス分析」画面例



▼「監視」画面例